のホタル

故 太田吉五郎さん（19歳）

太平洋戦争で特攻隊員（特別攻撃隊）として敵機動艦隊に突入、十九歳の若さで戦死した故太田吉五郎さんについて、村郷土史編纂委員の熊谷文弥さん（七三、東京都在住）から「広報ふだい」に寄稿をいただきましたので紹介します。

ホタル、これは夏の夜空に草むらから飛び立つ昆虫のホタルの話ではない。

名優高倉健扮する旧日本軍の特攻隊員が、愛する者に別れを告げて大空に飛び立って行くときの最後の言葉

「ホタルになって
帰ってくるよ」

という一言からとった映画の題名である。平成十三年に上映している。

この映画の「ホタル」と似たような運命の人がわが郷里普代村にもあったということを「普代村のホタル」という題名で郷里の皆さまにお知らせし、故人のご冥福をお祈りしたい。

若い人たちのために「特攻隊」という言葉の意味を簡単に説明しておく。正しくは特別攻撃隊、略して特攻隊と云い、敗戦間近の昭和十九年十月から始まった戦闘方法で、航空機以外の船舶も用いられたとのことであるが、戦後の書きものでは主に航空機を指している。

航空機に「往き」の燃料のみ積み込み魚雷や爆弾を抱え、敵の艦船などに自分の飛行機もろともに突っ込みもちろん自分も死ぬわけであるが、かなりの確率で大損害を与える戦闘行為である。

どんな危険な作戦でも一パーセントでも生存の可能性を残すというアメリカなどでは理解できない戦闘行為であるといわれた。

わが国では、中世鎌倉時代の元寇といわれる文永・弘安の役（一二七四・一二八一）に、九州へ押し寄せた蒙古の大船団が二度とも吹き荒れる大風で沈没し、あやうく日本が難を免れたことから、わが国は神に守られているといってこの大風を「神風」と称した。

このことから今次大戦のこれらの航空隊を「神風特攻隊」と称し神風特攻隊○○隊とグループの固有名詞を付けた。神風の呼称を冠しない特攻隊もあった。

わが普代村には明治二十七年（一八九四）の日清戦争以来昭和二十年（一九四五）の太平洋戦争敗戦まで百名の戦死者が記録されている。

その八十八番目が本村ただ一人の特攻隊員太田名部出身海軍飛行兵曹長太田吉五郎さんである。

筆者は平成十三年五月五日、普代村在住の兄、熊谷儀一とともに、故吉五郎さんの実妹太田シヲさん・卯之助さんご夫妻を訪問、吉五郎さんの遺影を拝礼した。

広報ふだい平成十二年十二月号によると、普代村太田名部故太田金之助氏次男太田吉五郎さん（大正十四年九月二十六日生）は、この攻撃隊に参加し終戦の前年昭和十九年（一九四四）十月二十九日、西太平洋において敵航空母艦に体当たりし戦死した。このとき十九歳の若さであった。平成十二年、普代村役場の調査記録は次のようになっている。

海軍　比島の神風特別攻撃隊
第二神風特別攻撃隊　零戦隊